

戦前期わが国地理学界におけるラッツェル 『人文地理学』の受容特性

手 塚 章

- | | |
|-----------------------------|---------------------------------|
| I はじめに | II-2 両大戦間期 |
| II わが国におけるラッツェル『人文地理学』の受容過程 | III わが国におけるラッツェル『人文地理学』受容の一般的特徴 |
| II-1 第一次世界大戦以前 | IV むすび |

I はじめに

ラッツェルの地理学思想，特に主著『人文地理学 Anthropogeographie』と日本の地理学思想の関係はどのようなものであろうか。これは非常に答えにくい設問である。

形式的にみると，両者の間には直接的な影響（もちろんラッツェルの地理学思想が日本の地理学に与えた影響）を示す明らかな証拠がいくつもある。京都帝国大学文科大学に我が国初の地理学講座が開設されたとき，助教授として招かれた石橋五郎が，ラッツェルの『人文地理学』に基づいて講義内容を編成した話は有名である。京都帝国大学文学部地理学教室発行の『地理学談話会会報，第三冊』には，石橋五郎自身の回顧として次のような文が載せられている。「明治四十年，（中略）地理学の講義を（中略）十月から開講することとした。併し，京都からの話が甚だ突然であったので，講義原稿の為自分は非常な勉強を余儀なくせられた。講義の方針として小川教授の自然地理学に対し自分は人文地理学を講ずることとし，昼夜兼行ラッツェルのアントロポゲオグラフィを精読し，之を基礎として兎に角人文地理学の体系を建てた。当時の人文地理学界は我国と云わず欧米諸国でもラッツェル以外には著書もなかったので，自分の講義編成の苦心は並々ではなかった」（石橋，1936，1~2）。

また，さらに時代をさかのぼると，地学雑誌の創刊号（明治22年発行）の冒頭に掲載された地理学史上名高い小藤文次郎の文章「地学雑誌発行ニ付地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス」がある。この文章がラッツェル『人文地理学（第一版）』の抄訳であることは，田村百代氏によって疑問の余地なく証明されている（田村，1978）。

しかし，だからといって，ラッツェルが『人文地理学』に盛り込んだ思想のうち，実質的にどの部分が日本の地理学思想に受容され，その後の地理学の展開に影響を与えたかは，識別が非常に困難である。これは一人ラッツェルに限らず，ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュやヘットナーにも大なり小なりあてはまる。ラッツェルの場合，その地理学思想が多面的であるだけに，我が国における受容がきわめて多岐にわたる検討課題や論点を含むということであろう。

近代日本、とくに戦前期日本の地理学思想については、従来、日本の指導的地理学者ごとに個別的な研究が蓄積されてきた。そのなかで、ドイツやフランスをはじめ、欧米の地理学思想が、彼らの地理学思想形成のうえで大きな役割を演じたことが、しばしば指摘されている。

これに対して、本稿では、むしろ欧米の主要な地理学者や、彼らの主要な地理学的著作から出発して、それらの我が国における受容過程を明らかにするというアプローチを試みた。国内における学派形成というよりも、各指導的地理学者が欧米の地理学思想から直接的な影響をこうむるという側面は、アカデミー地理学の確立が遅れた諸国に共通の傾向である。したがって、とくに戦前期日本のような場合には、上記2方向からのアプローチを併せ用いることが特に有効であると思われる。

ラッツェルの『人文地理学』は、この種の考察の素材として、きわめて好都合である。第一に、ラッツェルは人文地理学の確立者として、特に戦前期日本の地理学界でもっとも関心をもたれた欧米地理学者の一人であった。第二に、『人文地理学（第1巻）』第1版から第4版の刊行年次（1882年、1899年、1909年、1921年）が示すように、わが国のアカデミー地理学揺籃期である明治後期から、確立期の昭和初期にかけて、ラッツェルはつねに同時代的な権威であり続けた。この点では、「過去の人」とみなされたリッターやフンボルトと異なるとともに、新たに権威を獲得したヴィダル・ドゥ・ラブラーシュやヘットナー、シュリューターとも異なっている。第三に、日本人にとって、ラッツェルの『人文地理学』はきわめて難解であった。その難解さは、彼のドイツ語表現の難解さという側面もあるが、しかし、それ以上に彼の地理学思想そのものの多面性に根ざしている。それゆえ、ラッツェルの地理学思想について、紹介者の評価が一定せず、人によって紹介の内容や評価がかなり異なっている。また、このような評価の移り変わりに学界の動向を重ね合わせることも容易である。

本稿では、ラッツェルの『人文地理学』に直接関係する文献だけに、考察の対象を限定した。部分的な言及や間接的な影響を含めると、文献の量はおそらく膨大なものになる。ところで、いかなる地理学思想であれ、その受容には必ず歪みをとまうものである。ラッツェルの『人文地理学』は、なかでも歪みの大きな部類にはいるであろう。一口に「歪み」といっても、そこには水準の異なるいくつかの段階がある。第一に、誤訳などにみられる単純な間違いや思い違い。第二に、著作全体のなかで何をピックアップしたか。選択による歪み。第三に、思想潮流のなかでの位置づけ方。解釈にとまう歪み。もちろん、これらは互いに深く関連している。わが国でのラッツェル『人文地理学』の受容にさいしては、これらいずれのレベルについても、その実例に事欠かない。

本稿では、以上に述べたような視点から、わが国地理学界におけるラッツェル『人文地理学』の受容のあり方を検討し、そこに見られる欧米地理学思想への対応の仕方について、いくつかの特徴を指摘することにしたい。以下では、まず古い時代から順をおって、わが国地理学界におけるラッツェル『人文地理学』への参照状況をあとづけ、次いで、そこに見られる受容の特性を論じることにする。

Ⅱ わが国におけるラッツェル『人文地理学』の受容過程

第1表は、ラッツェルの『人文地理学』に直接関連する我が国の文献をリストアップしたものである。初めての試みであるため、重要な見落としが数多くあると思われるが、以下では第1表に基づき

第1表 わが国におけるラッツェル『人文地理学』関連文献（戦後期を含む）

-
- (1882年：Anthropo-geographie 刊行)
- 1889年：小藤文次郎：地学雑誌発行ニ付地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス。地学雑誌， 1， 1-3。（1882年版第1章および第2章の抄訳を含む）
- 1891年：金田橋太郎：普通教育并に學術上に於ける地理学の地位を論ず。地学雑誌， 3， 249-256。
- (1891年：Anthropogeographie〔第2巻〕刊行)
- (1899年：Anthropogeographie〔第1巻・第2版〕刊行)
- (1909年：Anthropogeographie〔第1巻・第3版〕刊行)
- (1921年：Anthropogeographie〔第1巻・第4版〕刊行)
- 1929年：阿部市五郎：ラッツェルの人類と環境に関する見解に就いて（1-3）。地理教育， 10（245-250/353-357）および11（146-152）。（1899年版第13-22節のほぼ全訳を含む）
- 1929年：阿部市五郎：ラッツェルの人文地理学の問題及び方法。社会学雑誌， 61号， 89-93。（1899年版第34-36節のほぼ全訳を含む）
- 1930年：阿部市五郎：ラッツェルの人文地理学の限界及び法則。地理教育， 11， 436-442。（1899年版第39-41節のほぼ全訳を含む）
- 1931年：国松久弥「フリードリヒ・ラッツェル：その生涯と学説」古今書院。（O. Schlüter（1906）：Die leitenden Gesichtspunkte der Anthropogeographie, insbesondere der Lehre Friedrich Ratzels. のほぼ全訳を含む）
- 1935-36年：飯塚浩二：地理学史の諸問題（1-4）。地理学評論， 11（839-857）および12（418-437/870-898/957-996）。
- 1942-44年：ラッツェル著/菊田太郎訳：人文地理学（1-20）。地理学， 10（1019-1031/1149-1161/1243-1257/1409-1418/1549-1560/1649-1658）， 11（106-117/207-215/307-314/399-406/483-490/575-580/655-661/815-824/885-891/957-963/1025-1032）および12（73-80/149-154/223-228）。（1899年版序文から第90節までの全訳）
- 1963年：野間三郎：ラッツェルとその生涯。地理， 8， 1134-1140。
- 1972年：山野正彦：F. Ratzelの再評価に関する一つの試み：「位置」及び「空間」概念を中心に。人文地理， 24， 241-267。
- 1974年：水津一朗「近代地理学の開拓者たち：ドイツのばあい」地人書房。
- 1975年：野間三郎：「中心と周辺」：ラッツェルにおける空間分化の研究とその発展。地学雑誌， 84， 71-83。
- 1983年：シュタインメツラー著/山野正彦・松本博之訳「ラッツェルの人類地理学」地人書房。
-

ながら、これらの文献について若干のコメントを加えていくことにしたい。

II-1 第一次世界大戦以前

文献リストの冒頭に掲げられている小藤文次郎と金田橋太郎の文章は、どちらも1882年に刊行されたラッツェル『人文地理学 Anthropo-geographie（初版）』に関連したもので、わが国では最も早くラッツェルの影響を示した文章だといえる。なお、石田（1971）によれば、ラッツェルへの言及が日本で最初になされたのは、1893年の地学雑誌に発表された金田橋太郎の論文であるとしている。確かに、この論文中にもラッツェル『人文地理学』への言及がみられる。ちなみに、原題 Anthropo-geographie に対して、金田は「人事地理学」という訳語をあてている。

しかし、田村百代氏が疑問の余地なく証明したように、地学雑誌の創刊の言葉ともいえる小藤(1889)

の文章は、その全体がラッツェル『人文地理学（初版）』の冒頭部分を引き写したものである（田村、1978）。また、小藤の教えを受けた金田橋太郎にしても、すでに1891年に発表した文章で、ラッツェルの *Anthropo-geographie* を参考文献の第一にあげている。

もっとも、これらの文章は人文地理学というよりも、むしろ地理学全体の概念規定や位置づけを論じたもので、その意味では、ラッツェルの地理学思想の中核部分に触れたものとは言い難い。1890年代は、ドイツやフランスを中心に、人文地理学という分野の存在理由や、その学問的性格や研究方法をめぐって、さまざまに揺れ動いた時代だったわけで、ラッツェルの『人文地理学』は、そのなかで非常に個性的な一つの試論だったと言える。このように流動的な状況に、一定の総括が与えられたのが、20世紀初頭、1914年までの約十年間で、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュやジャン・ブリュヌやシュリユーターなどが、いわば決算書を書いたと考えることができる。

このような観点からすると、小藤や金田が参照した部分は、ラッツェルの『人文地理学』にとって、何ら本質的でない周辺的な部分であったと言わざるをえない。もともと、ラッツェルの『人文地理学（第1巻）』は、一つのアイデアを軸に、試みの論を展開したような性格が非常に強いように思われる。多様な側面に目をくばるとか、バランスがとれているとかいう教科書的性格に乏しい書物だといえる。さらに、1899年に刊行された第2版では、このような試論的性格がさらに強まり、小藤や金田が参照した部分は、すべて本文中から削除されている程である。したがって、この時期におけるラッツェルへの言及は、形式的にはラッツェルの強い影響力を示しているようであるが、実質的な意味合いにおいて、ラッツェリアン・ドクトリンの「受容」と言えるようなものではなかったように思われる。

田村百代氏は、先に触れた論文のなかで、ラッツェルの「本論」の部分も影響を与えていたのではないかと、今後検討すべき課題にあげている。この点が未解決であることは、今日においても同じである。しかし、このことの検討がそれほど重要な課題であると筆者は考えていない。その一つの理由は、小藤自身が後年にいたりラッツェル流の地理学に対して否定的な評価を下していることである（小藤、1908）。また、田村氏によって対比・紹介された小藤の訳文とラッツェルの原文を比較すると、そのラッツェル理解には多くの誤りが含まれている。すなわち、小藤が時間をかけてラッツェルの『人文地理学』に取り組んだとは到底思われえないという点も、理由の一つである。

『人文地理学 *Anthropogeographie*』に限定せず考えると、明治期におけるラッツェルの影響としては、他にも例えば、志賀重昂がラッツェルから多く引用しているという矢守（1992、P.92）の指摘がある。また、吉田（1982）によれば、石橋五郎が東大時代に教えを受けた坪井九馬三は、ラッツェルの『政治地理学』を講義内容の下敷きにしており、早稲田大学での講義録『歴史地理学』（1905）をみても、その影響は歴然としている。確かに、両者の目次を見較べただけでも、その類似は明白である。ただ、両者のテキストを子細に対照してみると、ラッツェルの文章を直接下敷きにした文章はほとんど存在しないように思われる。その意味で、これら二つの著作は全くの別物といってよい。本文の比較対照を含め、両書の厳密な比較については、後日、別稿で試みることにしたい。

本稿の主目的であるラッツェル『人文地理学』に話を戻すと、明治期のなかで、おそらく最も重要かつ本格的と思われるのは、周知のごとく、京都帝国大学の石橋五郎による紹介ということになるで

あろう。本稿の冒頭で述べたように、京都帝国大学に地理学講座がもうけられ、そこで人文地理学を講義するにさいして、(彼自身の言葉によれば)「昼夜兼行ラッツェルのアントロポゲオグラフィを精読し、これを基礎にして」講義ノートを作成したことは、有名なエピソードだからである。

しかし、残念なことに、着任当初における石橋の講義録は公刊されることもなく、また細部にわたって紹介されることもなかった。したがって、明治期末のこの時期に石橋がラッツェル『人文地理学』のどの部分を受容し、また、どのような理解の仕方をしたかについては、よく分からないと言わざるをえない。ちなみに、第1表をみると、明治期末から大正期にかけては、恐らく筆者の文献検索が不十分なためであろうが、完全な空白期間となってしまった。明治期末は、大幅に改定された『人文地理学(第1巻・第2版)』(1899)が刊行された直後にあたり、わが国における反応が注目されるだけに、この時期の検討は今後の重要な課題である。

なお、時期はずれるが、京都帝国大学における石橋五郎の講義内容に関しては、別技篤彦氏が作成された克明なノートが存在する。このうち、入学直後の1年次生(1回生)を対象とした「人文地理学概説」は、石橋が「ラッツェルのアントロポゲオグラフィを精読し、これを基礎にして」講義ノートを作ったという科目にちょうど相当するように思われる。別技氏のノートがしめす石橋の講義は、昭和4(1929)年度に行われたものである。したがって、時期的には着任当初から既に20年以上経過していることになる。この間に、石橋の講義ノートが根本的な改訂をこうむった可能性は大いに考えられる。しかし、これまで紹介されることがなかった貴重な史料なので、本項の最後に少し詳しく紹介しておきたい。

まず、「人文地理学概説」と題された講義内容の全体構成をみるために、各部分ごとに冠されたタイトルを列挙しておこう。

第1篇 序論(1, 地理学, 殊に人文地理学の発達; 2, 人文地理学の機能)

第2篇 本論

第1部 自然対人類

第1章 自然と人類の関係についての二考察

第2章(1. 自然が人間個体の上に及ぼす影響; 2. 自然が個体の精神上に及ぼす影響; 3. 自然が社会に及ぼす影響)

[気界と人生(Atomosphere and Human Life)]

1. 気候的要素と人類(① 水湿との関係; ② 気圧との関係)
2. 人類の気候馴化
3. 気候と疾病との関係(① 黄熱病; ② マラリア; ③ 睡眠病; ④ 脚気)
4. 気候帯と人類の経済生活(① 熱帯; ② 亜熱帯; ③ 温帯; ④ 寒帯)
5. (世界の風系と不規則風)
6. 気候が政治生活に及ぼす影響, 気候の変動と社会の消長

[陸界と人生 (Lithosphere and Life)]

1. 水平的地形 (① 水の圍繞と陸地 ; ② 海岸と住民 ; ③ 港湾と交通)
2. 垂直的地形 (① 山岳の方向と交通との関係 ; ② 山岳の高さと長さとの関係 ; ③ 山の傾斜と交通との関係 ; ④ 垂直地形と生業および人口分布)
3. 地質の影響 (地性と人文)

[水界と人生 (Hydrosphere and Human Life)] (1. 海洋と生産 ; 2. 湖沼 ; 3. 河川)

第2部 人間が自然に与える影響

一見して明らかなように、年間を通しての講義内容が、大筋において非常に体系的に組み立てられている。ただし、石橋の講義のスタイルが、ただ単にノートを読み上げるというものではなかったこと、さらには、かなり早口の講義であったこともあってか、細部にわたる章節目目の整理には多少問題が残る。上記のまとめにしても、特に節や項目に関しては講義ノート自身に数字が記されているわけではなく、筆者の判断でつけたものが多い。したがって、石橋自身の講義ノートを、そのまま忠実に反映しているとはいえないであろう。しかし、そのような限界があるにせよ、別技氏による克明なノートは、昭和初期段階における石橋五郎の人文地理学体系を知るのに十分な資料を提供してくれる。

では、この時期において、「日本のラッツェル」と異名をとった石橋五郎の「人文地理学」とラッツェル『人文地理学』には、どのような対応関係が認められるであろうか。まず、人文地理学の課題設定に関していえば、石橋の認識はその多くをラッツェルに依拠している。「人文地理学概説」の冒頭「序論」で、人文地理学の課題を論じるに際しても、既往の地理学者で言及されているのはラッツェルのみである。かくして石橋は、人文地理学の主たる課題を「人類の社会生活に対する自然の影響」を研究することであると、さらに、それを原理追究の観点よりなすべきだとしている。

しかし、序論を別としていえば、ラッツェル『人文地理学 (第1巻・第2版)』と石橋の「人文地理学概説」との間には、直接的な対応関係がそれほど見られるわけではない。先に、坪井九馬三の『歴史地理学』とラッツェル『政治地理学』の類似について述べたが、前者の章節だてが後者のそれを殆ど忠実になぞっているのに対して、そのような関係がここでは全くといってよいほど見られない。また、個々の記述についても、ラッツェルの文章が直接の下敷きになっている部分はほとんど存在しないように思われる。ただし、これはあくまで昭和初期の講義内容を基にした議論なので、着任当初のそれに関する判断は差し控えねばなるまい。

以上、石橋五郎の講義ノートをめぐって、長々とした注釈を施してきたが、本項の主眼はラッツェル『人文地理学』に対する第一次世界大戦以前の参照状況についてであった。先にも述べたように、特にこの時期については文献検索の不備のため、まだ確定的なことを言いうる段階ではないが、現時点での全体的な印象としては、ラッツェルが『人文地理学』で展開した地理学思想が、この時期においては非常に断片的かつ不完全なかたちでしか受容されなかったように思われる。明治中期から後期にかけては、わが国でも志賀重昂・内村鑑三など、環境論的地理学の大きな流れがある。しかし、これとラッツェルの環境論地理学とが、どのような関係にあるのか、形式的にはともかく、実質的には

直接的な関係があまり見られないのではあるまいか。

II-2 両大戦間期

第一次世界大戦後から敗戦までに至る両大戦間期は、わが国におけるアカデミー地理学の発展期でもある。地理学の専門雑誌が数多く創刊されるとともに、地理学の学問的基盤をめぐる検討が熱心になされた時期といえる。このような動向を背景に、第1表でも示されているように、ラッツェル『人文地理学』を直接紹介する努力、すなわち翻訳の試みがこの時期にいくつか見られる。しかし、いずれも部分訳にとどまっている。この他に、サンプルの著作 *Influences of Geographic Environment* (1911) の日本語訳も、部分的にはラッツェル『人文地理学』の重訳ということになる箇所が多くみられる。しかし、多少なりとも間接的になるため、第1表には含めていない。

ちなみに、これらの翻訳については、今日ほとんど知られていない。ラッツェルに限らず、欧米の地理学者や地理学思想に関する我が国の論文や著書では、既存の日本語訳が完全に無視されているのが実情ではなかろうか。例えば、飯塚浩二のラッツェル論をみても、原典の同じ部分を論じているのに、阿倍市五郎の翻訳については一言も触れていない。また、戦後の野間（1975）や山野（1972）や水津（1974）のラッツェル論をみても、菊田太郎の翻訳には全く言及していない。もちろん言及に値しない翻訳もあるわけで、飯塚浩二が阿部訳を無視したのは当然だと言えないことはない。しかし、菊田太郎の訳は、分量からいっても全体の約3分の1におよび、なかなかの苦心作である。もちろん、あら捜しをすれば、時おり訳を省略した箇所があったり、意識にすぎるような箇所も数多く見られるが、かなり意味の通じる日本語になっていることは確かである。菊田訳の一番の難点は、もっとも肝心な部分、人文地理学の本質を論じているような箇所にしばしば誤訳があることで、その他の大部分が比較的正しく訳されているだけに惜しい気がする。しかし、それにしても、後世の研究者がこれらの翻訳にまったく言及しない現状はおかしいと思わざるをえない。これら翻訳の存在を同時代に生きた人々だけが知っていて、そうでない後世の学徒は知る手がかりすら乏しいということになるからである。研究努力の浪費を避ける意味からも、既存の翻訳例についての確な情報を提供すべきであろう。

ちなみに、翻訳という点で関連していえば、第1表にあげた国松久弥の著作『フリードリッヒ・ラッツェル：その生涯と学説』は、その内容のほとんどがシュリユーターによるラッツェル論 (Schlüter, 1906) の翻訳である。シュリユーターのラッツェル論は、主として『人文地理学 (第1巻・第2版)』で提示されたラッツェルの地理学思想を整理したものであり、非常に明解で、また実によく行き届いた評論だといえる。その証拠に、ちょうど50年後に公表されたシュタインメツラーによるラッツェル論 (Steinmetzler, 1956) の前半は、このシュリユーターの論文内容を要約したものである。ちなみに、シュタインメツラーのラッツェル論も日本語に訳されており、第1表の末尾にあげられている。これらシュリユーターとシュタインメツラーのラッツェル論は、ラッツェル『人文地理学 (第1巻・第2版)』をめぐる代表的な考察文献であり、その両方が翻訳されているのは日本だけのように思われる。ラッツェル『人文地理学』の日本語訳が非常に断片的であるのに対して、これは皮肉な現象である。

もっとも、国松がシュリユーターによるラッツェル論を訳出したという事実は、その半面で、彼が

『人文地理学』それ自身の理解に困難を感じていたことを示している。国松自身、その著書『フリードリッヒ・ラッツェル：その生涯と学説』の前書きで、ラッツェルの主要な著作（すなわち *Anthropo-geographie* と考えられる）をまだ通読すらしていないと述べている。この場合、通読というのは、通して読んでその意味を理解することであろうが、そういうことと言えば、筆者自身まだ通読していないし、おそらく今日まで通読したひとが我が国に何人いるのだろうかということになる。すなわち、まず手始めにラッツェル論の数々をひもといて、大まかな見当をつけるというのが、筆者自身を含めて一般的に普通なやり方で、原典は必要なところだけ読んで、結局通読には至らないというのが、わが国におけるラッツェル研究の実情ではなかろうか。そのような意味で、国松の著作は、わが国におけるラッツェル地理学を受容のあり方をよく象徴しているように思う。

以上のような日本語訳を別にすると、この期間中にラッツェルの『人文地理学』を正面から論じたものとしては、飯塚浩二の「地理学史の諸問題」がある（飯塚、1935/36）。これは、のちに『人文地理学説史』という彼の代表的な著作の主要部分となったものである（飯塚、1949）。

地理学評論に4回にわけて掲載されたこの長編論文は、さながらラッツェル論の観を呈している。分量でいうならば、ページ数の半ば以上がラッツェルの検討にあてられている程である。そしてそこでは、主として『人文地理学（第1巻・第2版）』の「序論」と、それに続く第一部「人文地理学の課題と方法」が、直接的な考察の対象とされた。飯塚によるラッツェル評価には、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュやドゥマンジョンなど、フランス地理学派の手になる文章の影響が随所に認められる。しかし、同時にラッツェル『人文地理学』冒頭の主要箇所について、各所での確かな全訳あるいは抄訳がほどこされており、ラッツェルの文章に対する飯塚の理解の深さを物語っている。その意味で、『人文地理学』の始めの部分、約100ページに関する抄訳あるいは抜き書きとしては非常に出来がよく、今日でも大いに参考になる。ただし、飯塚の論点が、ラッツェルの環境論を吟味することと、ラッツェルの有機体論を批判することの、ほぼ2点に集中していたために、『人文地理学（第1巻・第2版）』の本論をなしている諸概念（たとえば、位置であるとか、空間であるとか、運動であるとか、分化であるとか、境界であるとかの諸概念）は、検討の対象として取り上げられていない。したがって、いたって表面的にみれば、確かに明治期よりも取り上げる範囲は広くなったものの、やはり『人文地理学』本論の考察までには至っていないとすることができる。

すなわち、戦前期日本の地理学文献をみると、日本語訳にしろ方法論的吟味にしろ、いずれも『人文地理学（第1巻・第2版）』の冒頭約100ページの部分に関心が集中していたようである。これに対して、例えば、ラッツェル『人文地理学』に刊行当初から深い関心を示していたフランスでは、その中心概念である「位置」や「広がり」や「分化」について詳細な批判的検討を行っている。また、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュを中心とするフランス地理学派においては、『人文地理学（第1巻）』とならんで、むしろ『人文地理学（第2巻）』から大きな影響を受けたように思われる。ちなみに、わが国の場合、『人文地理学（第2巻）』への関心は、少なくとも地理学界に関するかぎり、非常に低かったように思われる。

したがって、第二次世界大戦前までの状況に関して言えば、かつて石田龍次郎が述べたように、わ

が国では「ラッツェル学者といわれるほどの研究者もです、上すべりしてしまった」ということになるのかも知れない(石田, 1984, p.293).

本稿の対象期間はここまでである。ただし、第1表では戦後の文献も含めた。そこでリストアップされた文献は、どれも我々に身近な論文や著書ばかりなので、改めてコメントを加えるまでもないように思う。これらの論文や著書では、主としてラッツェルの方法論的側面(例えば、運動や拡散や伝播といった動的側面とか、位置や広がりといった空間的側面)が、主要な考察対象になっている。すなわち、それまで欠けていたラッツェル『人文地理学(第1巻・第2版)』のまさに本論の部分に関する吟味が、ようやく行われるようになったといえる。これに対して、戦前の関心は専ら「課題設定」の部分に集中していた。したがって、ラッツェルというと環境論ということになる。それはそれで間違いではないけれども、ラッツェル地理学のオリジナリティーは、むしろ方法論的側面にあったわけで、それは、国松久弥が翻訳したシュリューターのラッツェル論が、早い時期からすでに明確に指摘していたことである。

また、『人文地理学(第2巻)』はラッツェル地理学思想のもう一つの側面を示すものであるが、これに対する関心は戦前・前後を通じて、わが国では低調なままであった。その点からすると、わが国のラッツェル『人文地理学』に対する評価は、ようやく半ばに達したのみともいえる。さらに、ラッツェルには『人文地理学』のほかにも、人文地理学に関する重要な著作がいくつもある。これらの著作を含めたラッツェル人文地理学の全体的な理解は、今のところシュタインメツラーやシュリューターによるラッツェル論の日本語訳に頼らざるをえないというのが、わが国における現状であろう。全体を組み立てるための部品にあたる研究が、わが国ではラッツェルに限らず、きわめて乏しいからである。

Ⅲ わが国におけるラッツェル『人文地理学』受容の一般的特徴

前節では、ラッツェル『人文地理学』に対する我が国地理学界の参照状況について、直接関連すると思われる文献ごとに若干の検討を試みた。これらの作業を通じて明らかになった一般的特徴を整理すると、以下のようにまとめられるであろう。

まず結論的にいうと、ラッツェルの地理学思想と我が国の地理学が如何なる関係にあるかは、特に戦前期の場合、その正確な把握が非常に困難である。その理由は、大きく分けて次の3つに集約されるように思われる。

その第1は、第1表の文献リストを見てもわかるように、ラッツェルの『人文地理学』が、長期間にわたって多くの地理学者の関心を引き続けてきたことである。一体に、わが国の地理学思想は、戦前・戦後を通じて、いわば国内完結型とは程遠いおもむきを呈してきたように思う。特に、日本のような地理学分野の後発国では、アカデミー地理学の形成期において、欧米の地理学思想を選択的に吸収することが常に重要な課題であった。そのような状況の下で、戦前期の日本地理学界では、ラッツェルの名前がすでに明治期の末から有力な権威の一つとして鳴り響いてきた。したがって、ラッツェルは肯定的にせよ否定的にせよ、常に注目をあつめる存在だったわけである。

しかし、誰それはラッツェルの影響を強く受けたとか、ラッツェリアンであるとか、従来しばしば言われてきたことについて、その影響の中身が実際には細かく吟味されてこなかったのも事実である。これは、日本地理学史の研究者にとって、テキストの詳細な比較検討を通して外国文献からの影響を分析することが困難であったという事情と、わが国の欧米地理学史の研究者がもっぱら原典にのみ依拠して、既存の紹介の努力を無視しがちだったという事情が重ね合わさった結果であろう。

それはともかく、明治期の末から現在にいたるまで、ラッツェルに対する関心が、強弱はあっても途切れることなく続いてきたことは事実である。そして、その際の関心の所在が、研究者の態度や立場に応じて、また時代々々の風潮に応じてかなり異なっているのではないかという推測は、だれしも容易に思いつくことである。換言すれば、わが国の地理学者たちが、ラッツェル『人文地理学』の特にどの点に注目したかは、非常にバラエティーに富んでいたわけであり、そのことがラッツェル『人文地理学』と日本地理学界の関係を正確に捉えることを困難にしている。

『人文地理学』に限らず、一般的なラッツェル評価ということでは、欧米においても日本でも、時代に応じた大まかな流れが存在する。例えば、山野・松本(1983)は、欧米における従来のラッツェル評価を、次の4つの潮流に整理している。

- (1) 環境(決定)論者としてのラッツェル像を強調するもの。
- (2) ゲオポリティクの思想的根底を準備した政治地理学者としてみる見方。
- (3) 第2の潮流の裏返して、ドイツの戦争責任に連座する誤った思想のちねしとして、批判的考察の対象とする立場。
- (4) ラッツェルの「運動」「位置」「空間」などといった概念を評価する見方。

欧米では、これら4つの潮流が(1)~(4)の順番にしたがって、時期的に異なって現れたというわけである。ただし同時に、「現実にはこれらは相互に関係しあい、重なりあってあらわれている面も多い」(山野・松本, 1983, p.237)と述べている。

翻って日本の状況を考えた場合、これとほぼ同様な流れを認めることができる。例えば石橋五郎は第1の流れを代表し、飯塚浩二は第3の流れ、山野(1972)をはじめとする戦後の諸論文は第4の流れに属するということは、間違いなく言えそうである。それどころか、むしろ我が国の特徴は、これら潮流の変化がより先鋭化された形で現れる点にあるとすら言える。ドイツ本国はもとより、フランスなどにおいても、ラッツェルの多様な側面は初期の頃から、かなり幅広く評価されている。例えばシュリューターにしてもシュタインメツラーにしても、ラッツェルの『人文地理学』に対して、かなり公平な目配りをしているのではあるまいか。その点でいえば、先にあげた4つの潮流は、少なくともドイツやフランスにおいては非常に入り組んでおり、単純に整理することはできない。

これに対して、わが国では各研究者がそれぞれの関心にしたがって、自論の展開に直接関係しそうなところだけ目を通し、それに基づいてラッツェルを評価してきたために、評価の移り変わりが先鋭化された形で現れるのであろう。確かに、わが国の研究者の場合、難解な外国文献に取り組むわけであるから、欧米の研究者にくらべて大きなハンディキャップが存在する。それだけになおさら、わが国の先輩たちが積み重ねてきた内容理解や日本語訳の努力を、有効に活用せねばなるまい。例えば、

主要な外国の地理学者ごとに、日本語関連文献を網羅した基本的な文献目録が当然あってしかるべきであろう。それらの積み重ねが、ハンディキャップを克服する最も確実な道だからである。

わが国でラッツェル『人文地理学』の受容が複雑な様相を呈する第2の理由は、その内容が日本人にとって非常に難解だったことに求められる。かつて辻村太郎は「外国地理学の現状」と題した文章のなかで、「ラッツェルの人類地理学（アントロポゲオグラフィー）は難文で有名である。その昔、新渡戸稲造先生に伺ったところ、そんなでもないとの答えを得たが、読むに及んで長いフレーズを後戻りして見ても、半わがりの箇所が多かった」（辻村、1954、p.79）と記している。たしかに、筆者自身にしても、一読して論旨がすっと頭に入るといえるわけにはいかない。したがって（というのは失礼な類推かもしれないが）、これまでラッツェルに取り組んだ人々も、『人文地理学』の全体を丁寧にかつ正確に理解していたわけではあるまい、あるいは一部分だけしか読んでいないのではないか、また、その理解は往々にして皮相的なものにすぎないのではないかと辻村はいうわけである。確かに、そのような意味で、ラッツェルの『人文地理学』は、受容に際しての「歪み」が非常に大きかった著作の代表例にあげられるように思う。

先にも述べたように、一口に「歪み」といっても、そこには水準の異なるいくつかの段階がある。まず、最も基本的には読解の誤り、すなわち誤解や誤訳が存在する。文献リストに掲げた部分訳の試みは、どれをとっても数多くの誤訳を含んでいるように思われる。また、誤解や誤訳を別にしても、部分訳の場合には、著作全体のなかで特に一部分だけをピックアップするわけであるから、それによって著者の論点と紹介者の論点が大きすぎてしまうことが、往々にして生じがちである。さらに、より上位の水準でいえば、特定の著作を孤立的に取り上げたために、全体のなかでの位置づけが見失われるということがある。ラッツェルは膨大な著作を残しているので、他の著作を検討しなければ『人文地理学』についての正確な評価は不可能だという議論が常に出てくる可能性がある。ラッツェル『人文地理学』とわが国地理学界との関係をみると、これらの「歪み」を検討することは、厄介ではあるが重要な前提作業の一つである。

また、ラッツェルの『人文地理学』が難解なのは、単に、そのドイツ語が外国人にとって理解しづらいというだけではない。そこに盛られている内容にも問題があると言わねばならない。すなわち、そこでは余りに多様なアイデアやヒントが、系統的に整理されることもなく、いわば断片的に次々と論じられている。この点に関しては、シュリューターの次のような指摘が、まさに当を得ているように思う。「ラッツェルの最大の功績は、その著作中で非常に多面的かつ生気に満ちた思想的刺激を提供したことである。（中略）しかし、それらの示唆に富む思想が、ラッツェル自身の文章中においては、ほとんど系統だった完全なかたちで展開されることはなかった」（Schlüter, 1906, p.599）。このように考えると、ラッツェルの文章がスキリ頭に入らないのは、読者の頭が悪いからではなく、ラッツェルの文章自身が非論理的だからだということになり、はなはだ都合がよい。それはともかく、このようなゴツ煮的性格が、受容のさいの「歪み」をさらに増幅させたことは言うまでもないことである。今世紀を通じて人文地理学で主張されてきた論点のほとんど全てが、すでにラッツェルの『人文地理学』に出揃っている、とはよく言われることである。このようなラッツェルの著作の性格が、

日本での受容形態にも反映しているように思われる。

最後に、第3の問題点として、ラッツェルの影響という場合、直接的な影響と間接的な影響を明確に分離することが非常に困難だという事情がある。このことは、言うまでもなく、すでに指摘した第1の点とも、また第2の点とも深く係わっている。すなわち、ラッツェルの地理学思想を、ラッツェル自身の著作『人文地理学』からではなく、シュリユーターなりサンプルなりシュタインメツラーなり、他の解説者の目を通して受容している場合が多いのではないか、ということである。

シュリユーターの詳細なラッツェル論が、国松久弥によって早い時期にほぼ全訳されたことは既に述べた。また、サンプルの *Influences of Geographic Environment* (1911) は戦前のわが国でラッツェル以上に広く読まれたと思われる。周知のように、サンプルのこの著作はラッツェル『人文地理学(第1巻)』に基づいており、その部分的な翻訳が本文中に多数ちりばめられている¹⁾。両者を比較してみると、どの部分を抜粋したかという問題は残るものの、訳文それ自身はかなり正確なものである。したがって、難解なラッツェルに取り組むよりも、「多くの人々はサンプル」のこの著作を通じて「ラッツェリアン・ドクトリンを飲み込んだ」と思っているのではないか(辻村, 1954, P.79)ということになる。サンプルの著作が早くから翻訳の対象になったことは、このことを良く示している(村尾昇一訳『地理環境文化史(上)』1926年刊)。

ちなみに、サンプルのラッツェル理解に対しては、日本にかぎらず根強い批判があり、このことがラッツェル評価の問題をより一層複雑にしている。すなわち、サンプルはラッツェルの「できの悪い垂流」にすぎない、ラッツェルの『人文地理学(第1巻)』は名著だが、サンプルの著作は過度な自然環境決定論であり、ラッツェルの思想をゆがめて伝えている。このような観点に立って、ラッツェルの再評価を主張する人が多いのではあるまいか。しかし、少なくとも我が国において、テキストの比較検討を通じて両者の違いを詳細に吟味する作業が、これまで行われてこなかったように思われる。その点で、常識化している上記の主張も大いに再検討する余地がある。難解なゆえに、ラッツェルの著作がいわば神格化されてきたような傾向があるからである。

IV む す び

今日のわが国におけるラッツェル評価は、環境決定論者として一顧だに値しないとする見方がようやく影をひそめ、示唆に富む様々な地理思想の持ち主とする見方が一般的に定着してきたように思われる。ただ、ラッツェルの原典に取り組む地理学者が、現在ほとんど存在しないことには変わりはない。これが第二次世界大戦前の状況と大きく異なる点である。戦前期のわが国地理学界におけるラッツェル理解が、極端に言えば断片的であり不正確であり間接的であったとしても、数多くの地理学者が熱意をもってラッツェルに取り組んだことは確かだからである。

ラッツェルが活躍した19世紀末のヨーロッパは、形成期にあった「人文地理学」という領域に対して、さまざまな構想がぶつかりあった時代といえる。同時に、人文地理学にしる社会学にしる文化人類学にしる、どれもが形成途上で、いわば未分化な時代でもあった。ラッツェルは、このような状況の下で、地理学の殻にとじこもることなく、社会科学・人文科学の幅広い領域にかかわった。ラッツェ

ルの地理思想が、現代地理学の関心事と深く結びついているとして、今日、世界的に再評価されつつあるのは、ラッツェル地理学のこのような学際性を反映している。

しかし、ラッツェルに対する関心が高まった一方で、その著作自身に接する機会は、現在きわめて限られている。戦前期のわが国では、ラッツェルの主著『人文地理学』に対して、日本語訳の試みが一部でなされたこともあるが、残念なことに定訳と呼ぶべきものを得ることなく終わった。この点で、同じく再評価の目が向けられているヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュとは、そもそもの出発点で大きなギャップが存在する。

もちろん、『人文地理学』のみでラッツェルの全容が理解できるわけではない。「偉大な地理学者の思想を評価するときには、主著以外の雑多な文章を精力的に検討することが、つねに肝要な心がまえである。(中略)政治地理学に関するラッツェルの思想は、単に『政治地理学』だけを読んでも正しく理解することはできない。(中略)残念なことに、この種のアプローチが今だに多く存在する」(Sanguin, 1990, p.581) というサンガンの言葉は、『人文地理学』についてもそのままあてはまる。しかし、英語を別として、外国語を理解することが非常に困難なわが国の現状を考えると、ラッツェルの地理学思想を代表する主著『人文地理学』を日本語で読めるようにしておくことは、ラッツェル理解を着実に深めていくための第一ステップであるように思う。

本稿の作成にあたっては、別技篤彦氏から貴重な資料を借覧させていただいた。また、本研究は平成4年度日本地理学会秋季大会における報告に基づいており、その際に、関連する事項について数多くのアドバイスをいただいた。以上、記して感謝したい。なお、調査の一部に、文部省科学研究費一般研究C(課題番号、05680122;代表、手塚 章)を使用した。

註

1) センプルの著作に含まれる引用箇所の出典については、Broc (1981) の詳細な検討がある。ブロックによれば、「出典を明示することに無頓着だったラッツェルとは対照的に、センプルは細心の注意をはらって参考文献を注記した」(p.89)。各章末に明示された参考文献は、ブロックによると総数330におよび、その著者数は280人にわたるといふ。そのそれぞれについて、ブロックは引用回数と引用内容の分析を試みたのである。最多の引用回数は当然のことながらラッツェルであり、合計83回におよぶという。

ただし、ブロックの分析は、あくまで明示された引用文献についてだけである。これに対して、センプルの本文中には、引用箇所を明示せずに『人文地理学(第1巻)』を翻訳した部分が数多く存在する。これは、もともと副題が「ラッツェルの人文地理学に基づいて」であるから、ラッツェル『人文地理学』については特に引用箇所を明示する必要はないと、センプルが判断したためであろう。したがって、ラッツェルからの引用回数は、決して83回どころではなく、ほとんど各ページに何らかの痕跡が認められるほどである。

参 考 文 献

飯塚浩二(1949):『人文地理学説史』日本評論社、223p.
石田龍次郎(1984):『日本における近代地理学の成

立』大明堂、310p.
石橋五郎(1936):教室回顧三十年.京都帝国大学文学部地理学教室『地理学談話会会報(第三冊)』.

- 1～12.
- 金田樞太郎 (1893) : 地理学の分科. 地学雑誌, **5**, 7～12.
- 小藤文次郎 (1908) : 獨乙地理学者間の新思潮. 歴史地理, **11**, 38～44.
- 田村百代 (1978) : 小藤文次郎によるドイツ地理学の導入. 地理学評論, **51**, 406～415.
- 辻村太郎 (1954) : 外国地理学の現状. 地学雑誌, **63**, 79～84.
- 坪井九馬三 (1905) : 『歴史地理学』早稲田大学出版部, 234p.
- 村尾昇一訳 (1926) : 『地理環境文化史 (上)』而立社, 571p.
- 吉田敏弘 (1982) : 史学地理学講座における近代地理学導入の系譜. 京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房, 192～205.
- Broc, Numa (1981) : Les classiques de Miss Semple: essai sur les sources des "Influences of Geographic Environment", 1911. *Annales de Géographie*, **90**, 87～102.
- Sanguin, André-Louis (1990) : En relisant Ratzel. *Annales de Géographie*, **99**, 579～594.
- Schlüter, Otto (1906) : Die leitenden Gesichtspunkte der Anthropogeographie, insbesondere der Lehre Friedrich Ratzels. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, **22**, 581～630.
- Semple, Ellen Churchill (1911) : *Influences of Geographic Environment: On the basis of Ratzel's System of Anthro-geography*. New York/London, 683 p.
- Steinmetzler, Johannes (1956) : *Die Anthropogeographie Friedrich Ratzels und ihre ideengeschichtlichen Wurzeln*. Bonner Geographische Abhandlungen, Heft 19.

Ratzel's *Anthropogeographie* and the Japanese Geography of Pre-war Period

Akira TEZUKA

The relation between Ratzel and Japanese geography is extremely complicated. From the beginning of modern Japanese geography, i.e. the Meiji era, the name of Ratzel has been always famous among the founders of modern Japanese geography. The first professor of human geography at the university level, i.e. Goro ISHIBASHI at the University of Kyoto, prepared his lectures mainly on the basis of Ratzel's *Anthropogeographie*. And the opening article of the first volume of 'Journal of Geography (Chigaku Zasshi)' was an abridged translation of the first chapter of Ratzel's *Anthropogeographie* (1882). But, the evaluation of Ratzel's conceptual influence on Japanese geography is very difficult, because Ratzel's ideas on human geography were multi-faceted and somewhat obscure.

In this article, the author examined only those writings that dealt explicitly with Ratzel's *Anthropogeographie* (1882, 1891 and 1899) as a main concern. If incidental mentions and indirect echoes were to be included, the number of related writings would be decidedly much greater.

The acceptance of any foreign ideas goes necessarily with some kind of distortion. In this respect, Ratzel's *Anthropogeographie* is one of the most typical examples. Generally speaking, there are three different kinds of distortion. The most simple one is the mistranslations or misunderstandings of foreign text itself. Second kind of distortion stems from the biased emphasis on some particular parts of the text. Finally, there exists the distortion of isolated acceptance, i.e. the in-

terpretation of one particular work without any consideration of other remaining works. It is a matter of course that these three kinds of distortion are deeply interconnected each other. We will easily find many examples of each of these three kinds in the long period of acquaintance with Ratzel's *Anthropogeographie*.